原が際き黒気始し限は潮ま 吸無き春を北州に訪ふばな はる ほくしょう と 関鳴れる滄海越えて

の曠野に羊群遊ぶ の大森に八光揺ぎ

恋ふる往昔の 情に懐る アカシヤ カシヤの白花慕ひて歩むくは朧月に仄かに薫るの。 きょいかい の静寂けき名残り

古塔にひびく 懐 しき鐘

紅光うすくエルム

らひ行 の若人らは緑に臥せ [かそか に牧場にながる ゖ る白雲影仰ぎ ムに映えて ŋ

> 神(しなび 我等が高夢は流が高夢は流が 玻璃永劫の清き夜空をはりえいらう。きょうようとうというというというというといれている。これではては、のでみぎんが、よいはては、のでみぎんが、よいではてない。 の皓翼声なく衝ち れゆ くか

Ŧi.

血潮と共に尚湧き立てたりとのというとのなった。これでは、ためないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、ないのでは、 大空鳴りて渾瞑 しき風声 に銀雪 2 暮く は 歌たれ 乱が ゆく ŋ れ

雄はき 久^ょ遠 ん 哀愁時にしづかに来れどかないみとき 「自然」 の絢夢はうづもれゆきて と <u>血</u>ち 潮ぉ の人と